「遊分舎（あそぶんじゃ）」の開設

高知県中芸広域連合保健福祉課

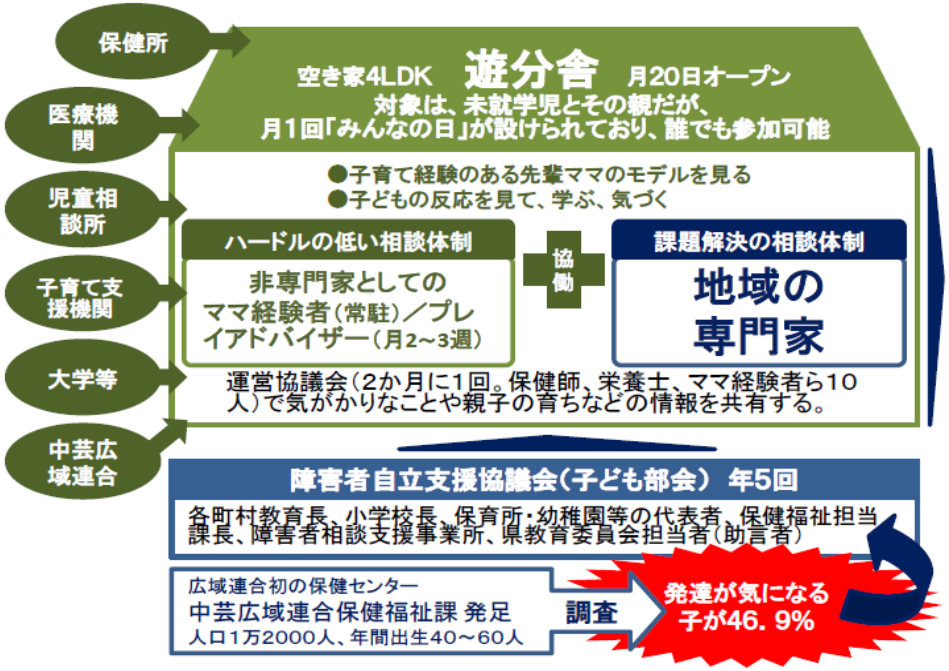
高知県中芸広域連合（馬路村、安田町、田野町、奈半利町、北川村）では、平成21年度に保健センターを広域化した保健福祉課を設置。未就学児の4割以上が発達の気になる子と判明し、母親の孤立も深刻なため、ハードルの低い相談体制を有する「遊分舎」を関係者との協議を重ね、開設した。従来の公的な母子保健事業の考えや展開方法から脱し、先輩ママから学び、当たり前の生活の中から母親の困りごとに対応する支援拠点となっている。

概要・体制

・「遊分舎」は月20日開所、先輩ママが常駐。誰もが立ち寄れる地域交流の居場所。
・多くの母子が利用するため、広域連合保健福祉課では、母子保健・子育て支援の教室等を開催し、専門職が月の1/3程度訪れ、コンタクトをとりやすい体制をとっている。
・一方、ちょっとした悩み、相談なら、母親同士で対応できるよう、「先輩ママのモデルを見る」→「子どもの反応を見る」→「気づく」というハードルの低い相談体制も確保している。
・「それでいいよ、大丈夫」と気づきを促すことを重視した地域子育て支援拠点としている。

背景・課題

・気になる子どもの増加を危惧し、保健福祉課設置を機に調べると未就学児童446人のうち要経過観察が46.9%。要支援児童も増加傾向。
・保育所に多く入所し地域と母子の接点がない。
・ハイリスク対応とともに、個から見えてきた地域課題に予防的に対応する必要があった。



効果

■毎月100人程が利用。平成29年度の年間延利用者は1083人（実人数140人）に達した。
■0歳～未就学児童のほか小学生も利用。近所との交流もはじまった。
■先輩ママを見て「ここへ来ると子どもの表情がいい。私も変わらなきゃ」と気づいた例もあり、ハードルの低い相談、体験・学び・気づきの場として認識。グレーゾーンの対応も母親同士で可能になってきた。
■早期に保健師等の伴走型支援につながり、不登校が解消した例も出てきた。

保健センターの連携機能・役割

・広域連合保健福祉課発足を機に過去データの分析、アンケートで実態を把握した。
・子育てが「個人の問題」で「地域の問題」と認識されておらず、現行の制度・サービスで対応できていない現実を子育て・教育関係者等に問題提起した。
・母親の自己肯定感を高めることで子どものそれを育み、親同士のつながりで気づきが得られる、「支えられ感」ある子育て体験ができる居場所を地域・学校・関係者でつくる必要があると訴えた。
・苦しさを抱え込む母親も多いことから、「公衆衛生活動は住民がつくるもの。強みを見られる専門職ではない人材も重要」とし、表現力が身につくよう役者経験があるプレイアドバイザーも配置した。
・保健センターで待つのではなく、集まる場に出向き、接点が持てるように提供体制を組み換えた。
・教育行政は、グレーゾーン対応の手立てが薄いことに悩んでいたため、それに応える体制をつくった。

効果・成果

・親が主体性を持って参加し、安心感・楽しみの場、交流・学び体験の場、先輩ママやママ同士の学びの場、すなわちハードルの低い相談体制、体験・気づきの場と認識されてきた。
・先輩ママの対応を通して子どもが落ちつく様子を見て、「私は叱ってばかりだった」と気づく母親の姿も見られるなど、母親同士がアドバイスし合う関係性ができてきた。
・近所の高齢者が遊分舎の庭木を剪定をしてくれたり、おすそわけをしてくれたり、地域交流の場となって母親と地域がつながり、当たり前のお節介が見られる場にもなってきた。

ポイント

●広域連合保健福祉課設置の機会を活かした、●母子保健のデータやアンケートで実態を把握した、●教育分野の困りごとも把握した、●子どもに関わる責任者と県関係者の協議組織をつくった、●地域課題という認識で、地域の力を育てる方針を共有した

「遊分舎（あそぶんじゃ）」の開設
高知県中芸広域連合保健福祉課（連携体制構築に向けたプロセス）

Ⓐ 俯瞰的立場の職員

俯瞰的立場の職員の存在

・県保健所、県教育委員会の担当者の参画を得て、モデル事業等も活用。

⓪ 位置についてヨーイ

・保健活動の中で**発達が気になる子ども、子育てしづらさや生きづらさを抱えた親が増えていると感じていた。**

② 根拠を集める

・平成21～22年の訪問で**新生児の5割が1日50～80gも体重増加し、泣く度にミルクを飲ませていたことを把握。**
・ママへのアンケートで**62%が育児等にストレスを抱え、25%が不眠や生きづらさを感じていることを把握。**
・未就園児ママへ聞き取り、**「育児がしんどい」46%、「10代で喫煙」「4割が喫煙」「親が不登校」等の実態判明。**

⑥ 育てる、促す

・予算は、**障害者総合支援法の発達障害のための地域生活支援事業と県単のあんしん子育て応援事業、巡回相談員整備事業等を活用**した。
・**新聞にも取り上げられ、利用増**につながった。
・この活動が圏域市町村の保健師部会で認知される中で、小学校養護教諭とつながり、生きるための力を育み、自分を、相手を大切にできる子どもの育成を目指した「いのちの教育プロジェクト」（県保健体育課）に結びついた。令和元年から**学校で担えない性教育を遊分舎でスタート**させるなど、活動の幅を広げている。

⓪ 位置についてヨーイ → ① 風をつかむ → ② 根拠を集める → ③ 仲間をつくる → ④ 協議組織をつくる → ⑤ ツールをつくる → ⑥ 育てる、促す → ⑦ 評価・フィードバック

① 風をつかむ

・平成21年度に**中芸広域連合が保健福祉業務を広域化し、保健福祉課を設置**したのを機に、**未就学児446人を調べると、46.9%が「発達に気がかりがある子」に該当**した。

③ 仲間をつくる

・平成22年度に子育て支援・母子保健・教育に関わる有志で**「中芸地区の子どもの育ちを支える仕組みを考える会」を組織。**

④ 協議組織をつくる

・子育て環境の未整備を解決するため、「考える会」を翌年度に**障害者自立支援協議会「子ども部会」に位置づけ**、毎年5回程、議論。
・26～27年度に県の家庭教育支援にかかるモデル事業に着手。母親の孤立等が「地域全体の課題」と認識されていないことを把握。
・そこで、**「親の経験不足」「子どもの発達に合わせた対応の不足」をカバーする「遊分舎」**を医師の空き家を借りて29年度に開設した。

⑦ 評価・フィードバックする

・母子保健の過去のデータの分析やママへのアンケートなどを遊分舎の開設前に随時実施し、得られた情報を関係者に提供した。
・個別事例は、遊分舎の運営協議会で2か月に一度、情報共有している。
・部会には県職員に入ってもらい、俯瞰的な目で見てもらった。

Ⓑ 人材育成の意識

人材育成の意識

・データ分析は広域連合の保健師10人、栄養士2人等で行い、実態を知る機会とした。・先輩ママの力、地域の力を重視した。 ・**「公衆衛生活動は住民がつくるもの。ストレングスを見られる地域人材が不可欠。専門的知識に偏るべきでない」という視点**を貫いた。